

デリダ亡き後、フランス思想の大御所的存在となったジャン＝リュック・ナンシーの思想形成において、ハイデガーはきわめて重要な位置を占めている。ナンシーは、初期から現在にいたるまでハイデガーとの対話を続けることで思考していると言っても過言ではなからう。実際、初期の著作から、ハイデガーは、カント、ヘーゲル、バタイユ、ブランショ、デリダとともに重要な源泉、ないしは対話者のひとりであった。とはいえ、ハイデガー思想が前景に現れてくるのは、比較的後の事で、とりわけ、『自由の経験』（1988）、『イメージの奥底で』（2003）である。近年でも、『黒ノート』の公刊を受けて、『ハイデガーの凡庸さ』（2014）を刊行するなど、ナンシーは止むことなくハイデガーとの対話を続けきたと言える。

本発表では、共存在と共同体、自由、イメージという3つの主題を取り上げ、それらのテーマにおけるナンシーのハイデガー理解と批判の論点を整理する形で、両思想家の接点を検討することにした。

ナンシーの出世作『無為の共同体』（1986）において、ハイデガーは何よりも、〈共存在〉Mitsein というトポスの重要性を浮上させた功績を称えられながらも、それが十分に発展されなかったことによって批判される。ナンシーによれば、現存在において、「死への存在」という側面が強調されることで、共存在というモチーフが背景にしりぞいてしまうからである。その後も、ナンシーは、自らの「分有」というモチーフを発展する際に、しばしばハイデガーを参照するが、それはしばしばバタイユやブランショの思想によって補完されるのである。

ナンシーがハイデガーを全面的に参照すると同時に対決するのは、彼の主著の一つ『自由の経験』においてである。『自由の経験』は、〈意志の自由〉を中心とした従来の自由論の系譜にいわば「けりをつける」ために構想されたものであるが、その出発点となるのがハイデガーの自由論である。カント、シェリング、ヘーゲルを讀解するハイデガーに導かれながら、ナンシーは自由という主題を問うことの必要性、それが遭遇する困難、自由と哲学の関係などについて議論を進める。その議論は直線的には進まず、いわば螺旋状に展開してゆくが、後半に入ると、ハイデガーに抗しながら、共同体、平等、悪、決断などのモチーフが独自の視点から論じられることになる。ここでもナンシーは、たとえばハンナ・アレントなどを参照項とすることで、ハイデガーの影響圏から脱しようとする。

一方、ナンシーは1990年代から多くの芸術論、絵画論を発表するようになるが、これらのイメージ論においても、ハイデガーは重要な対決・対話の相手である。とりわけ、『イメージの奥底で』に所収され、論集の理論的中核をなす「仮面の想像力」という論文は、ハイデガーの『カントと形而上学の問題』の19節から23節、つまり「根拠づけの第四段階 オントロギッシュな認識の内的可能性の根拠」の精読である。Bild という語のカントによる三つの意味ないしは用法をめぐるハイデガーの考察を再検討することによって、ナンシーはイメージの本質を理論的に解明しようと努める。

ただし、以上に触れた三つのテーマがけっしてばらばらの問題ではなく、ナンシー思想の屋台骨とも言うべき、〈基督教の脱構築〉という問題設定のうちにあることを忘れてはならないであろう。そもそもデリダが展開した「脱構築」という言葉そのものが、ジェラルド・グラネルが「存在への問い」の仏訳（1955）においてAbbauを訳すために考案したdéconstructionに由来するものであることが示しているように、さらには、ナンシーが出発点とするのが、ハイデガーが「世界の西洋化」と呼んで問題にし、デリダがハイデガーの軌に従いながら「世界ラテン化（mondialatinisation）」と呼んだ状況であることから明らかなように、ナンシーが、デリダを経由しつつハイデガーの系譜に連なることは明らかである。だが、その一方で、ナンシーはあくまでもキリスト教という枠組みを自らの思考の問題構成として堅持している点も忘れてはなるまい。

本発表では、以上に言及した以外の論考にも言及しつつ、ナンシーのハイデガー受容および批判の足跡を辿ってみたいと考えている。